

2章

知的障害者にとってわかりやすい 本と視聴覚資料

1. 知的障害者の読みの課題

(1) 本を読む能力

自分で本を読むためには、文字を読む読字力と読む内容を理解する読解力が必要です。文字を読む学習は、小学1年生で始まり、ひらがな、カタカナ、漢字と小学6年生まで膨大な文字の読み方を覚えます。読解力は、読字力に合わせて、1年生の後半ぐらいから学年を重ねるとともに発達していきます。小学校の中学年になると、ふだんの生活で使う言葉に加えて、抽象的な言葉や長い文章が使われた本を理解できる能力がついてきます。

知的障害者は、「発達期（18歳まで）に発症し、概念的、社会的、実用的な領域における知的機能（知的能力）と適応機能（社会生活に関わる）両面の欠陥を含む障害」と定義されており、読字、読解に必要な知的機能に障害があります。

障害の程度によって、本を読む能力にも個人差がありますが、傾向としておおむね次のことがいえます。

- ひらがな、あるいは漢字が読めなかったり、読める文字が限られたりします。
- 読んだ内容を理解することが難しい、あるいは部分的な理解に留まります。理由としては、理解できる言葉（語彙）数が少ない、長い文章（重文・複文等）になると意味が理解しにくい、「もし～ならば」という仮定や、受身等の表現がわからない、物語の文脈や登場人物の感情の理解が難しい、経験のない出来事をイメージすることが難しい等があげられます。
- 集中時間が短く読書に集中できるのは短時間です。人にもよりますが、15分から30分程度です。
- 興味のもてる本が拡がりにくい傾向があります。

(2) 読書の現状

読む能力から考えると、知的障害者が読める本は限られています。青年期から成人期と生活年齢があがり生活経験が増えていくに従い、知りたい情報や興味のある事柄も増えていきます。出会う人やテレビやインターネットを通して、さまざまな刺激を受けて生活

します。そうすると、読みたい本や雑誌、新聞は子ども時代とは違ってきます。恋愛、スポーツ、芸能、料理、旅の本等と生活年齢に合った読みたい本や雑誌は増えていますが、一般書であると読みたい本が読めないという経験も増えていきます。読んでもわからないと読まなくなり、読む楽しみや必要な情報を得ることから縁遠くなってしまいます。

2. 知的障害者が求める本

知的障害者は、どのような本を読みたいと思っているのでしょうか。彼らの読書を支援する活動が進まない原因のひとつに、読書へのニーズが本人たちから発信されないことがあげられます。そこで、全国手をつなぐ育成会連合会（知的障害者とその家族、支援者で構成された会員約10万人の全国組織）の協力を得て、知的障害者の読書や図書館使用の実情やニーズを調査しました。その中の項目のひとつとして本人たちが求めている本についての調査結果¹を報告します。

（1）調査対象と手続き

当事者向けにわかりやすく書かれた質問紙調査1,100通を連合会の全国55の支部に20通ずつ配布し、各支部で無作為に20名の会員を抽出して回答していただきました。調査期間は2016年9月～11月、本人、あるいは家族や支援者が本人に聞きとって記入し、郵送による返答をお願いしました。

質問は、「こんな本がほしいと思うことはありますか？ ありましたら、いくつでも書いてください。」として、自由記述で意見を求めました。

（2）調査結果

616件の回答で回収率は56.0%、有効回答604件の結果を集計しました。対象者の年齢構成は、最低年齢で10歳以下が8名、最高年齢で70歳代が2名、最も20歳代～40歳代が多くて436名（72%）でした。

療育手帳別²分類は、療育手帳A（重度）274名で45.4%、療育手帳B（中・軽度）269名で44.5%、その他・無記入61名で10.1%となり、AとBの人数はほぼ同数でした。

記入者別分類では、本人と本人への聞き取りが487名で80.6%を占め、本人の意見が反映された回答でした。

「こんな本がほしい」という質問項目についての有効回答人数は152名（25.2%）、総回

1 藤澤和子「知的障害者の読書支援のために求められる本：当事者への調査を通して」『図書館界』Vol.70, No.2, 2018, pp.448-456.

2 都道府県が発行する知的障害児者が社会的な援助を受けるために必要な手帳。厚生労働省が示す基準は、重度がA、中・軽度がBに区分される。自治体に応じて、例えば、最重度をA1、重度をA2等と区分を変えることも認められている。

答件数は164件でした。本のタイトルやジャンルの書かれた回答を「ジャンル別」、レイアウト等の表現特徴について書かれた回答を「本の表現形態」に分けて、療育手帳A、B、無記入等ごとの「ジャンル別」の回答内容と件数を図2-1、「本の表現形態」の回答を分類した6項目の内容と件数を図2-2、6項目の下位回答を表2-1に示します。総回答件数164の内「本の表現形態」は55件、「ジャンル」は109件、総回答の内容は57種類ありました。

1) 「ジャンル別」について

求められるジャンルは26種類あり、「マンガ」が21と最も多く、「乗り物」と「芸能・ファッション」が10、「絵本」9、「旅行」8と、上位5位までを占めました。

総数が上位10位までの中で、療育手帳AとBの両者の数の比率が1：2以上あるジャンルを、AとBの件数の差が大きいと考えると、Aが多いのは「絵本」「音楽」、Bが多いのは「マンガ」「乗り物」「芸能・ファッション」「旅行」「歴史」「スポーツ」でした。

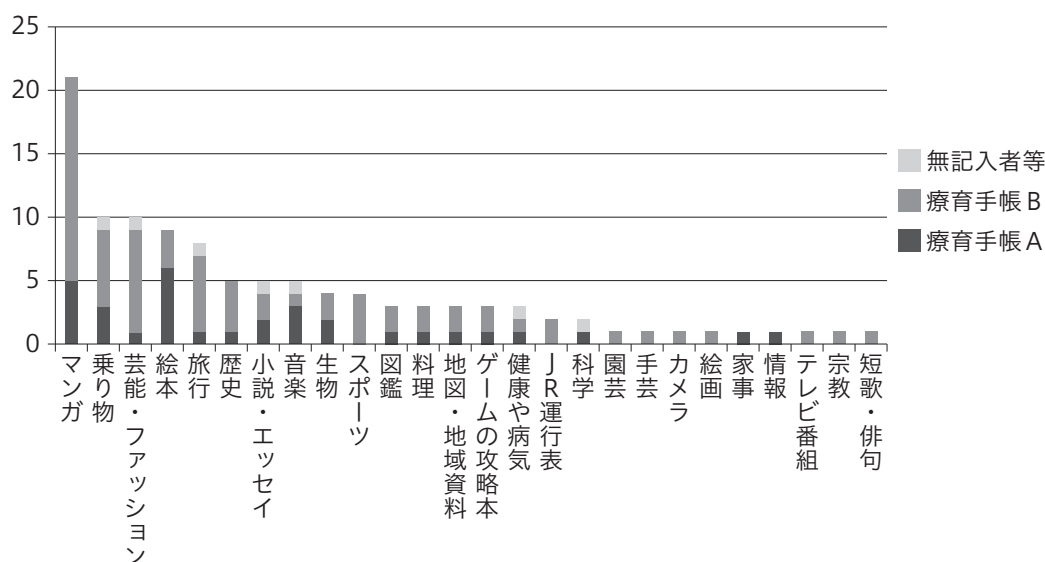


図2-1 本のジャンルへのニーズに関する回答

2) 「本の表現形態」について

求められる本の表現形態の6項目は「文字の表記方法」13、「生活年齢に合う興味や情報提供のある本」9、「絵、写真の使用」9、「わかりやすい文や本」9、「聴覚、触覚の使用」9、「装丁」3でした。療育手帳AとBの差の大きい項目でAが多いのは、「絵、写真の使用」「聴覚、触覚の使用」「装丁」、Bが多いのは「わかりやすい文や本」でした。各項目の具体的な回答内容は表2-1に示すとおりです。

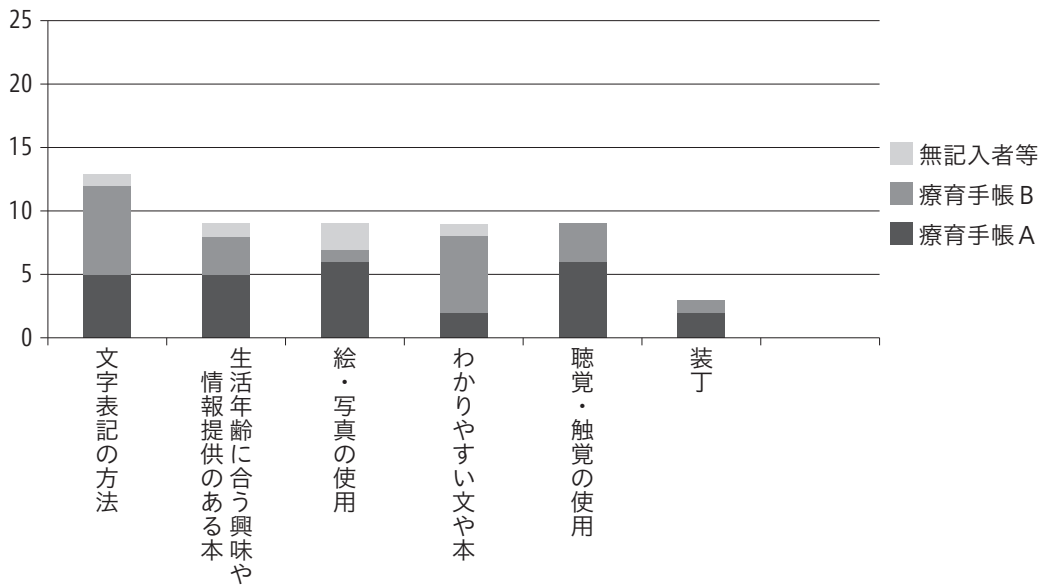


図 2-2 本の表現形態へのニーズの 6 項目分類

表 2-1 本の表現形態 6 項目分類の下位回答

文字表記の方法	生活年齢に合う興味や情報提供のある本	絵, 写真の使用
<ul style="list-style-type: none"> ルビをふる 文字が大きい 漢字が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> 知的と生活年齢に合う興味が続く本 わかりやすい障害者制度介護保険の本 障害についてわかりやすく書いた本 児童用ではないカニとシャチの本 一人暮らしの参考になる本 車椅子でも旅行できる本 自分で料理できる本 	<ul style="list-style-type: none"> 絵がある 絵だけの本 写真が多い本 絵がきれい 色彩が豊か はっきりわかりやすい絵や写真
わかりやすい文や本	聴覚・触覚の使用	装丁
<ul style="list-style-type: none"> わかりやすい文 難しい言葉の説明がある本 わかりやすい本 わかりやすく書きなおした本 	<ul style="list-style-type: none"> 音が出て読んでくれる本 触れることができる本 音のなる本 読み聞かせたときに、聞いて情景が浮かぶ本 点字付きの本 	<ul style="list-style-type: none"> 噛んでも丈夫な本 めくりやすい本

(3) 結果から考察されること

総回答は 57 種類あり、知的障害者には、さまざまな本が読みたいというニーズがあり、それは障害のない人と同じだと考えられます。

1) 求められるジャンル

マンガ、娯楽や趣味（旅行、絵本、芸能・ファッション、音楽、料理、スポーツ）の

本、好きなもの（乗り物や生き物）の本、一般知識を得るための歴史や病気・健康の本、ノンフィクションの小説・エッセイ等とさまざまなジャンルの本が求められていました。

2) 求められる本の表現形態

わかりやすい表現に配慮した本と、生活年齢に見合った内容の本が求められていました。漢字が少なく、ルビがふってある文字が大きい本、わかりやすい文で書かれている本、難しい言葉には説明のある本、きれいなはっきりした絵や写真が多く使われた本が求められていました。また、音が出て読んでくれたり、触れたりできる本、噛んでも丈夫な装丁で、めくりやすい本にもニーズがありました。

生活年齢に合う本としては、一人暮らしや旅行、料理ができる本、障害者の介護保険の本などがあげられており、自立して生活するために必要な情報を読書によって得たいというニーズが明確に示されていました。

3) 障害の程度による求める本の違い

文字の読めない重度の人は、絵本と音楽のジャンルの本と、絵と写真、聴覚触覚を使用する本へのニーズが多かったことから、マルチメディア DAISY、布や紙で触れて楽しめる本のように文字が読めなくても読書を楽しめる本が求められていると考えられました。

ひらがなや小学校の低学年程度の漢字が読める人もいる中軽度の人は、漢字にルビをつけたわかりやすい言葉と文で書かれた小説・エッセイ、スポーツ、歴史、乗り物、芸能ファッション、旅行、歴史、趣味等のいろいろな本を求めており、本への関心の高さがうかがえました。

このように調査により、障害程度に応じたわかりやすい表現に配慮したさまざまなジャンルの本が求められていることが、明らかになりました。そして、この結果は、次で紹介する LL ブックの特徴を示していました。

3. LL ブック

(1) LL ブックとは

LL ブックの LL とは、スウェーデン語の Lättläst の省略で、英語では “easy-to-read”，日本語では「やさしく読める」という意味を表します。LL ブックとは、障害や環境により、一般の書籍を読むことが難しい人たちに読書の楽しみや必要な情報を保障する目的で、生活年齢の興味や関心に合う内容が、わかりやすく読みやすく書かれた本です。2の「知的障害者が求める本」の調査で明らかになった知的障害者自身が読みたい、見たい本と同じ特徴をもっており、求められている本そのものといえます。

LL ブックの対象者は、知的障害者を中心として自閉症、読み書き障害、認知症などの障害のある人や、母国語と異なる国に移住してきた人たち、経済的、家庭的な理由で十分

な教育が受けられない人たちです。読む能力が上がりにくいために生活年齢に合う読みたい本と読める本の差が開いていく中学生以上の年齢層の人たちに、生活年齢にふさわしい興味ある内容をわかりやすく表現をすることによって、彼らが平等に読書や情報にアクセスできる権利を保障し、社会参加と豊かな生活の質の向上をめざすための本です。

対象となる人たちもさまざまですので、本のジャンルは、一般書と同じように多様であることが望まれます。さらに読者の読みの能力には個人差が大きいため、読みやすさのレベルは3段階に分けられます。

- | | |
|------------|--|
| レベル1（最も簡単） | ひらがなが読めない、あるいは少しは読める人を対象とします。具体的な内容で写真や絵が多い最も簡単なレベルです。 |
| レベル2（より簡単） | ひらがなやルビを付けた漢字は読めますが、抽象的な単語の意味や長い文章を理解することが難しい人を対象とします。レベル1より文字が多くなり、日常的な言葉を使用してストーリーがわかりやすく書かれている中間のレベルです。 |
| レベル3（簡単） | ルビなしで小学校低学年程度の漢字が読める人を対象とします。レベル2より写真や絵は少なくなり、ときどき長い文章や、普段使わない言葉も使用される LL ブックの中では最も難易度が高いレベルです。 |

（2）世界とスウェーデンの LL ブック

海外では、国際図書館連盟（IFLA）が、「やさしく読める図書に関するガイドライン」（1997年）を発表し、すべての人が読書する権利をもつ必要を提唱しています。スウェーデンなどの北欧諸国、オランダ、イギリス等ではやさしく読める本が発展しています。障害者が読書する権利を保障されることは、基本的な人権の保障であり、民主主義の基本であるという認識が反映されています。

LLブック発生の地のスウェーデンでは、1960年代から提唱されたノーマライゼーションの考え方に基づいて、LLブックの制作と出版が開始されました。ノーマライゼーションとは、「障害をもっていても、市民として平等に権利をもち、あたりまえに普通の生活を送れる社会を実現する」という理念です。障害があっても、文字が読めなくても、すべての人が読書の機会をもつことは、民主主義や正義、平等思想を実現するために重要な課題という認識にたっています。

現在まで LLブックの出版は継続されており、年間約30冊が MTM（MYNDIGHETEN FÖR TILLGÄNGLIGA MEDIER）という国立のアクセシブルなメディア機関という官庁で制作されています。知的障害者に加えて、認知症や移民を対象とした LLブックも増えてきています。また、民間の出版社からの出版も多くなりました。公立図書館には、必ず LLブックコーナーがあり、多くの本が並んでいます。LLブックは書籍のひとつの

種類として社会的に認識されているので、障害のない人にも普通に読まれています。また、書店にもコーナーがあり、誰もが購入できるようになっています。

(3) LL ブックのわかりやすい表現

LL ブックは、対象者の年齢を尊重して子ども向けの表現を避けて年齢にふさわしい言葉を使います。また、主な読者層の人たちに読んでもらい、彼らの評価を受けとめて制作することが求められます。LL ブックの読者は、読む能力や読めない理由が異なるため、わかりやすい表現へのニーズには違いがありますが、共通する基本的な表現方法として、次のことがあげられます。

1) わかりやすい文字と文章の使用

簡潔な短い文章で、抽象的な意味の単語は使わずに、できるだけ日常的によく使われる単語で表現します。

文字は、12～14ポイント以上の大きさのゴシック体です。漢字を使用する場合は小学2～3年生以下の漢字を使いルビを振ります。

2) 絵や写真やピクトグラムという文字以外の表現媒体の使用

文字を読まなくても「見てわかる」写真や絵やピクトグラムは、内容の理解を助けるための重要な媒体です。絵や写真は、内容と一致するはっきりしたものを使います。細部まで描かれた絵や、背景が写りこんでいる写真は、表現したい対象を見えにくくします。絵を見るだけでおおよその内容がわかる図2-3『すこやかハンドブック』や写真だけで表現した本があります。図2-4『旅行にいこう!』は写真を4コママンガのように使い、障害のある人もない人もいっしょに楽しめるLLブックです。編のタイトルにピクトグラムが使われています。

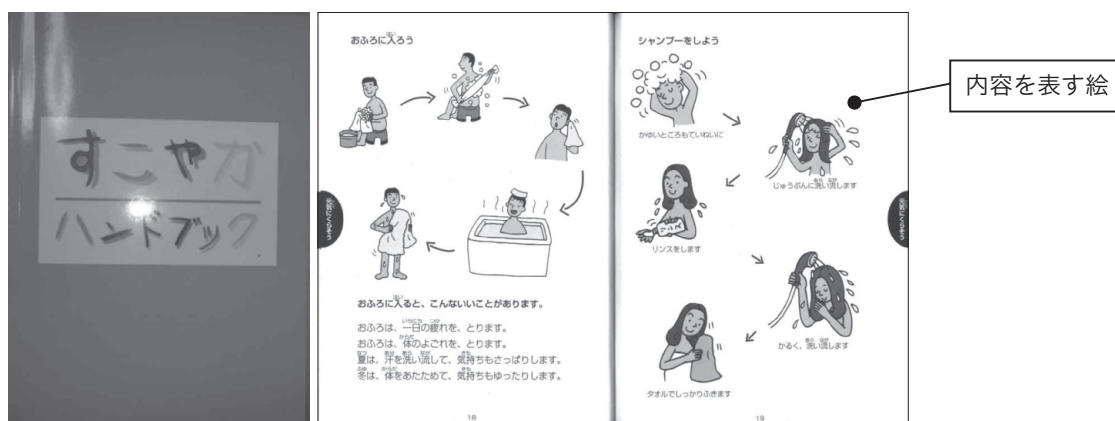


図2-3 『すこやかハンドブック』知的障害者が、すこやかに生活するためのくらしのマナーを伝えています。(大阪精神薄弱者愛護協会(現、一般社団法人大阪知的障害者福祉協会)1995.)

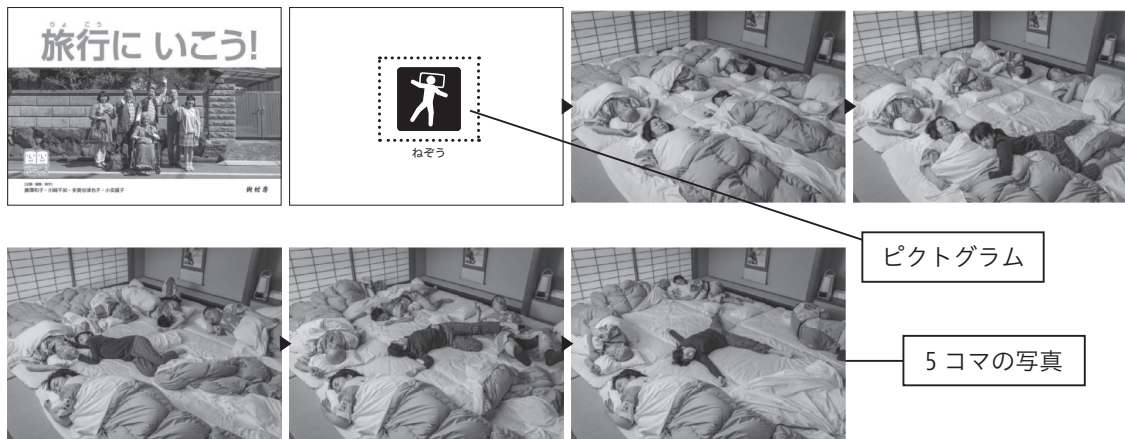


図2-4 『旅行にいこう!』「ねぞう編」家族旅行のおもしろいエピソード8編で構成されています。1編は、1ページに1枚配置した写真4～5枚で表現しています。(藤澤和子・川崎千加・多賀谷津也子・小安展子企画・編集・制作, 樹村房, 2018.)

ピクトグラムは、言葉の意味や概念を明瞭に表現した絵による記号です。話し言葉に障害のある人がピクトグラムを指さしてコミュニケーションをもつ手段として使用されています。1つのピクトグラムで1つの語彙を表し、名詞や動詞や形容詞等の品詞があります。文字の代わり、あるいは文字に添えることで、単語や文章の意味を伝えます。図2-5『うどん屋の仕事：静さんの1日』は、写真とわかりやすい文章とピクトグラムで表現されています。

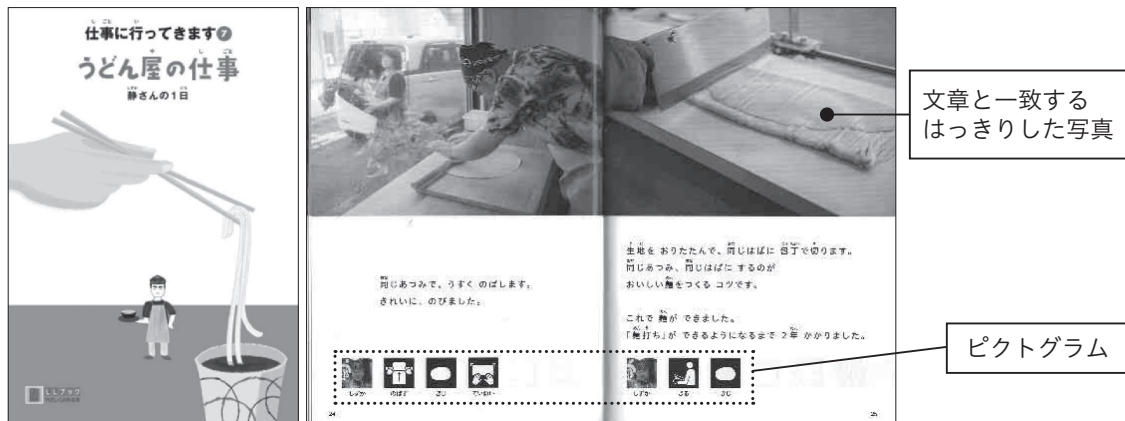


図2-5 仕事に行きます7『うどん屋の仕事：静さんの1日』知的障害のある静さんがうどん屋の仕事をする朝から夜までの生活を紹介します。(季刊『コトノネ』編集部編集企画・文, 藤井克徳・野口武悟監修, 社会福祉法人埼玉福祉会, 2020, pp.24-25.)

3) レイアウト

全体的に余白をゆったりととり、文字や写真や絵やピクトグラムを詰め込みすぎないようにします。

文章は、語の区切りごとに余白をあけるわがちがきをします。横書きが読みやすく、文章の始まりを左揃えにします。行間を広くとり、単語の綴りが切れる改行はしません(図

2-6)。

絵や写真やピクトグラムと文字を混在させずに配置します。例えば、上方に文字、下方に絵というように一定のルールを決めると見やすくなります。

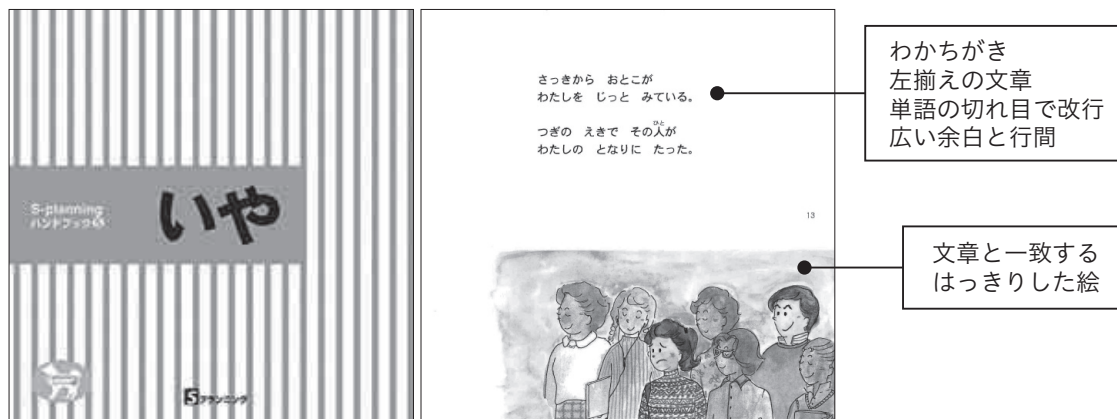


図2-6 『いや』自分の身を守るために、いやなときは「いや」とはっきり言って気持ちを伝える重要性を説いています。(1998年に全日本手をつなぐ育成会が制作、2017年にSプランニングで再発行)

4) 用紙と表紙

表紙や用紙は、よだれでぬれたり雑なめくり方をしても破れないように上質な紙を使います。文字と紙の色のコントラストがはっきりする色を使います。色覚障害の人のために、赤と緑のコントラストは避けます。

4. 一般書籍にあるわかりやすい本

LLブックやわかりやすさに配慮した本は、2009年で約70冊とカウントされており³、現在でも日本ではまだLLブックとして発行されている本は多くない状況です。知的障害者に日常生活や自立生活をするための情報を提供する意味合いをもつ本が多く、ジャンルも限られています。LLブックが増えることが最も望まれますが、それが実現するまでは、前節で示したLLブックのわかりやすい表現と同様の表現形態の一般書があれば、読める本が広がります。

2008年に、近畿視覚障害情報サービス研究協議会で結成されたLLブック特別研究グループのメンバー(教員、福祉職員、言語聴覚士、図書館司書等の約10名で構成)は、大阪市立中央図書館のヤングアダルト、写真集、児童書、図鑑のコーナーからわかりやすい本を選びました。レベル1(最も簡単)は写真集等の14冊、レベル2(より簡単)は短篇、詩を中心に11冊、レベル3(簡単)は、社会情報、事典、小説等の54冊です。

3 藤澤和子・服部敦司編著『LLブックを届ける：やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』読書工房、2009。

100名ほどの知的障害者にこれらの本から好きな本を選んで読んでもらい、わかりやすさとおもしろさと読みやすさについて、評価をお願いしました。3つの評価で満点をとった本が、レベル1で6冊、レベル2で4冊、レベル3で15冊ありました。それらは自動車や電車の写真が大きく載っている本、妖怪の絵がたくさん挿入された本、女の子のカラフルな写真集、動物の写真集、西遊記のようなテレビで見たことのある物語、きれいな絵が入っている短編小説等でした。すべての本が、前述したLLブックのわかりやすい表現を満たしていました。この活動によって、一般書の中にもわかりやすさに配慮した本があることが示されました。『公共図書館でできる知的障害者への合理的配慮』⁴ pp.174-186に公共図書館3館が一般書から選んだわかりやすい本のリストが掲載されていますので、選書の参考にしてください。

5. マルチメディア DAISY

マルチメディア DAISY は、Multimedia Digital Accessible Information System の略で、音声とテキストと画像（絵・写真等）を同期させることができる電子図書館の国際標準規格です。文字を読むことが難しい読み書き障害や知的障害者等の読書や情報提供のツールとして使用されています。専用再生ソフトやアプリを使って、パソコンやタブレットなどで利用します。音声の読み上げが行われているテキスト部分が黄色くマーキングされるハイライト表示があり、音声のスピード、文字の大きさや背景色とのコントラスト、ハイライト表示の色等が使用者に合わせて変更できます（図2-7）。

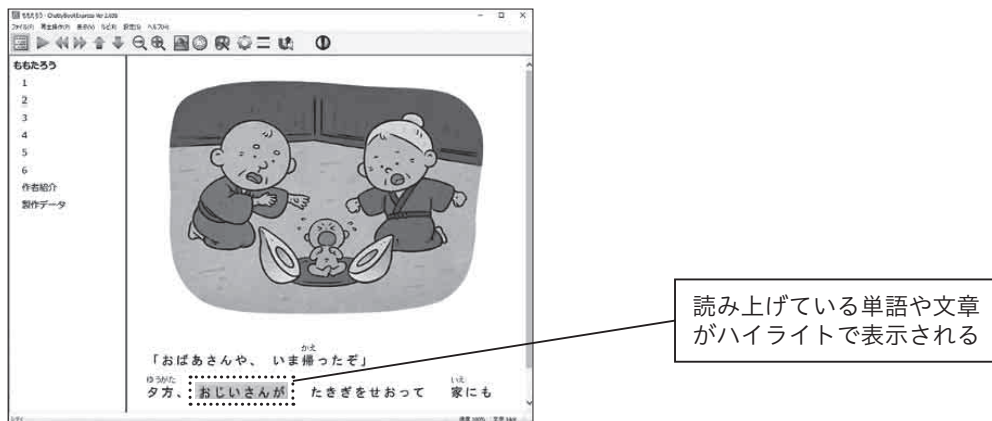


図2-7 伊藤忠記念財団 HP より 2015年版 Ver.BLUE (「ももたろう」浜なつ子文 よこやまようへい絵)

2019年に施行された著作権法第37条第3項の改正により、視覚障害その他の障害（知的障害や読み書き障害、上肢に障害等）で、通常の活字の読書が困難な人たちに限り、著作権者の許諾を得ずに公表された著作物を複製し、公衆送信を行うことができることにな

4 藤澤和子編著『公共図書館でできる知的障害者への合理的配慮』樹村房，2019。

りました。この規定が適用される法人として指定された⁵公益財団法人伊藤忠記念財団電子図書普及事業部は、「わいわい文庫」という名称で、2012年から毎年絵本や児童書のマルチメディア DAISY を、規定の適用者を対象に特別支援学校、小・中学校、公共図書館学校や医療機関などの団体へ無償で提供しています。2012年から2021年の間で全668作品が制作されました。さらに、個人でも国立国会図書館の「視覚障害者等用データ送信サービス」から「わいわい文庫」が利用できるようになっています。この活動により、通常の印刷物の読書が難しい人たちが、市販されている絵本や児童書等を視聴して楽しむことができるようになりました。また、著作権者の許諾済みの作品も収められており、これらについては所蔵している学校や公共図書館などで、だれもが視聴できます。

上記財団電子図書普及事業部と同じく指定団体である日本障害者リハビリテーション協会は、絵本や児童書のマルチメディア DAISY を「DAISY ライブラリー」として対象者へ実費で提供しています。公共図書館の障害者サービスとしても、貸出を行っています。また、小学校の国語の教科書で推薦されている児童書を中心に制作された「デイジー子どもゆめ文庫」も、対象児童は利用申請して視聴できます。

【LL ブックの情報】(2022年8月現在)

一般社団法人全国手をつなぐ育成会連合会 <http://zen-iku.jp/booklist>
S プランニング <http://www.s-pla.jp/>
樹村房 <https://www.jusonbo.co.jp/>
社会福祉法人埼玉福社会図書館事業部
<https://www.saifuku.com/shop/llbook/index.html>
国土社 <https://www.kokudosha.co.jp/>
大阪府立図書館「LL ブック所蔵目録」
https://www.library.pref.osaka.jp/central/taimen/LL_book.html

【マルチメディア DAISY の情報】(2022年8月現在)

伊藤忠記念財団電子図書普及事業わいわい文庫
<https://www.itc-zaidan.or.jp/summary/ebook/waiwai/>
日本障害者リハビリテーション協会
<https://www.dinf.ne.jp/doc/daisy/>

(藤澤 和子)

5 2019年から「視覚障害者等のために情報を提供する事業を行う法人」(法人格を有しないボランティア団体等を含む)で、事業を行うための技術的能力及び経理的基礎をもつ等の必要要件を満たす者については、文化庁長官による個別指定を受ずに、複製・公衆送信を行うことができるようになりました。以前に個別指定を受けている法人は引き続き指定を受けているとみなされます。